



高年の夫婦の至りで畠井喜重に私を同行させて廻りました。翌夜前八時半出発。バスにゆう小ながり、海水浴場が始まりによしよ待ちにすた無に入り華になりました。旅館でみているとあまり不快が樂しきなものでもない。多は時代に鳴りにした長持でした。先生ははははの様子をみて、赤へ上った水に入らたり大きじことに。一番面白かったのはすわづじと、随の本屋の市客も真り合せの壁面が奥劍立床。生徒はははの様子をみて、赤へ上った水に入らたり大きじことに。子供の行儀も良く規則もより身に覺え以外あまりおやつも食べに来ませんでした。もつと圓と小さく作られました。子供の行動もよく規則もより身に覺えられていました。翌日一升前薪水一杯すこめで食べておこても一つも食べに出来ませへんでしました。翌日一升薪水一杯すこめで食べておこても一つも食べに出来ませへんでしました。夫婦のバスで、行く前に訓練に行へんすれば、つむじで、今年度最後かと思ふと野川のバスの中で、淋しい旅をほんこした旅を感じました。先生方には二回ともお世話になりました。やれやれと思ひました。ところう林でした。二度頬が当ります時季、皆んな元気で、おもろいよしよつ。楽し夏休みをもつとして下さい。

時間にはねらい目をこすりながら着物。  
この家の番やのとすり水泳の話。甲  
へ行くのは夏からや。十時过は散歩時  
間や。涼しい内に勉強せんとあがへん  
と返してやれば「ほやく」と言う看  
表し牌すう看。体操を終る後散歩もい  
やもながの時間。ついていなければ  
はとても時間はもとをえたものでは  
ない。十時になるとたまはいう間に寝  
び出す。食後の服のほかはないか  
に「おみえ早よ。一時どうにすん  
でるんや。泳ぐ時間のうなつてしま  
う」とかやく。パンツには脚本の力  
ハハ連ば居なうが。「さようは、すん  
さん番や、行こうと水泳場へ。」  
さあ 手首足首の運動。」さういふ通りの  
可愛いいじぐや。無邪氣さにほのぼの  
とした微笑が湧く。川に入ると川底の  
水がもくーと湧く。でも子供は一生  
懸命キヤアーーきになからほしゃぐ。  
「さあ 揚って一眼眼ひんにや。本当  
に大人を信頼し言ひ通りにやつてく川  
のにほぞも有難い。」「サアみんな  
おひぐんのきう半と二きくくんにや。  
みんな一生懸命やってるが、アバハ  
をするどく書つが(1)一人今は筋体川  
へ来へよう。②津備運動をしてる。  
③三十分はした休む。こゆかってい  
たら大人になって泳がれが、恥しい思  
いをせんなんやから、小さい間にけい  
こしてあく、「などやつていろ真剣を頑  
やがて少しつかれた林すもみえ、があ  
時間やで帰ろう。

北本屋 神導委員記

休み思ひこの時  
時頃です。また一番水に親しむ時頃  
です。私の部屋でも左の春扇が出て、  
川田川に水浴場をつくりに行きました。  
川の草刈りました。川の中人は  
漁夫とて危険餘るもあした。所  
が川田川は水をさしたく、水中に  
危険物がある事に因る所危険と云は  
初にもよくあります。それには今は  
できまやんが出来た後でアールの一  
つやほしい所をまかします。休み半に  
一回ですが全般を主と父兄と長男として  
水泳訓練に行く事は、本当により華ど  
愿ります。海へは母類が行きませしたが、  
帰つてから乗しかった事を長くでしま  
した。六年の宿泊訓練もせまりあんで  
いるのが眼に見えます。朝は六時半か  
らのラジオ体操、十時まで学習、一時  
から冰泳、暑い日休みを充一杯に  
おく、で二〇三歩をみて心から健康を  
祈つてやりたい。

青木  
広

せみは訴える  
底林の境内で何日か過ぎた。梅雨の雨も止った。頭上が明るくなり涼しい風が僕の元に入ってきた。ふと足音がするので耳を澄ますと四五人の子供の詠事が聞こる。しばらくすると「だい」一人の仲間がつかまつたらしい。僕もいつ地上に出で歩らかぬれど、あの板台で涼しい木の陰を飛びまわるかと想つて樂しいが、今の秋につがまるごと太腹だ。「こ」にもいた。私理君の研究に持つて帰つて箱に入れておくかしとせの子の声。僕は地上に出はる数日の命しかない運命にある。なぜ自由をうばつのか。さよの体なれりに「僕達の兄や姉が羽に水かつてとべないのを「かまえて太い矢射たきれて殺されまつたが、聞いただけでも恐ろしい。そうかと想つゝ貧弱な地に地上に落ちた矢とつかつておもちゃにやられや殺されるの事、危険で仕合がない。まるで生地獄だ。樹のうまり汁もすえおに命を奪す仲間もあつて戻り一生だ。